

課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業（学術知共創プログラム）
研究概要

課題

C：新たな人類社会を形成する価値の創造

研究テーマ名

よりよいスマートWEを目指して：東アジア人文社会知から価値多層社会へ

責任機関

国立大学法人京都大学

研究実施期間

令和4年6月1日～令和10年3月31日

研究プロジェクトチームの体制

研究代表者等の別	氏名	所属機関・部局・職名
研究代表者	出口康夫	京都大学大学院・文学研究科・教授
分担者	大西琢朗	京都大学大学院・文学研究科・特定准教授
分担者	水野弘之	日立製作所・基礎研究センター・主管研究 長
分担者	嶺竜治	日立製作所・日立京大ラボ・ラボ長代行
分担者	坂出健	京都大学・公共政策大学院・准教授
分担者	稲谷龍彦	京都大学・大学院法学研究科・教授
分担者	唐沢かおり	東京大学大学院・人文社会系研究科・教授
分担者	大和田順子	同志社大学大学院・総合政策科学研究科・ 教授
分担者	玉澤春史	京都市立芸術大学・美術学部・客員研究員
分担者	田口茂	北海道大学大学院・文学研究院・教授
分担者	三谷尚澄	信州大学・人文学部・教授
分担者	護山真也	信州大学・学術研究院人文科学系・教授
分担者	Akiko Frischhut	Akita International University, Faculty of Liberal Arts, Assistant Professor

分担者	Jay Garfield	Smith College, Professor
分担者	佐藤將之	国立台湾大学・哲学系・教授
分担者	Yumiko Inukai	University of Massachusetts, Boston, Associate Professor
グループリーダー	秋吉亮太	京都大学・大学院文学研究科・研究員
分担者	工藤泰幸	日立製作所・日立京大ラボ・主任研究員
分担者	村上祐子	立教大学・大学院人工知能科学研究科・教授
グループリーダー	杉本俊介	慶應義塾大学・商学部・准教授
分担者	川口広美	広島大学大学院・人間社会科学研究科・准教授
分担者	鹿野祐介	大阪大学・社会技術共創研究センター・特任研究員
分担者	加藤猛	京都大学・オープンイノベーション機構・特定准教授
分担者	八木沢敬	カリフォルニア州立大学ノースリッジ校・哲学科・教授
分担者	白川晋太郎	福井大学教育・人文社会系部門・講師
分担者	橘英希	大阪大学・基礎工学研究科・特任助教
グループリーダー	神崎宣次	南山大学・国際教養学部・教授
分担者	伊藤孝行	京都大学・大学院情報学研究科・教授
分担者	猪原健弘	東京工業大学・リベラルアーツ研究教育院・教授
分担者	朝康博	日立製作所・日立京大ラボ・研究員
分担者	宮越純一	日立製作所・日立京大ラボ・主任研究員
分担者	大輪美沙	日立製作所・日立京大ラボ・研究員

配分（予定）額

（単位：円）

令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度
19,110,000円	19,110,000円	19,110,000円	19,110,000円
令和8年度	令和9年度		
19,110,000円	19,110,000円		

※令和5年度・令和6年度・令和7年度・令和8年度・令和9年度については予定額

研究目的の概要

現在国内外で生活空間のスマート化・DX化が急速に推し進められ、社会に正負様々な影響を及ぼし始めている。中でも本研究はリアルとバーチャルなWE(人間関係・絆・共同体)の貧困化というWE問題に焦点を当て逆にWEを再活性化するスマート化・DX化の処方箋を描く。

ここで言うWE問題とは、正確には、いかにしてリアルな生活環境での人々の絆の弱体化・人間関係の希薄化とバーチャル空間におけるスマートモビズム(群衆化)の蔓延(ヘイトトークの跋扈・フェイクニュースへの脆弱性)を防ぎ、リアルなWEを豊穡化しバーチャルなWEを健全化すべきかという課題である。本プロジェクトは人間・社会観の人文学的深掘りと文理・産官学連携による実証研究を密接に連関させることで、この課題に答える。

研究計画の概要

本プロジェクトでは、東アジアなど非西洋の思想伝統に注目し、そこから「できなさ」を基軸とする人間観や(私を含め)どのような個人をも中心に据えない脱私中心的WE観、さらには非自足的な者同士の相互委譲のネットワークとしての社会観などのオルタナティブな人間・社会観を析出することで、スマート化によって増悪した西洋的人間・社会観を非自明化・相対化・問題化すると共に、そのオルタナ価値観に基づいたWE問題の解決策を提案する。具体的には、(1)スマートモビズムを回避するため、「単なる見物者としてのWE」ではなく、合意し行動するWE(WEアクター)をリアルとバーチャルを貫いて再確保することを目指し、「e-ひと」をファシリテータとする合意形成支援ツールを用いて、福井県越前市をフィールドとする実証実験を行う。(2)(固定的で閉じたWEではなく)流動的で開かれたWE(モバイルWE)のリアル世界での再活性化を志向し、小田急が沿線に実験的に設置する人流滞留スポット(溜まり場)を舞台として、「e-ひと」をメディアータとする人的交流支援ツールの効果実証を行う。(3)これらの実証実験を通じて、「e-ひと」と人間との関係性に関して「主人-奴隷」モデルとは一線を画すフェローシップ(対等的仲間性)に基づいた新たなモデルを提案する。